

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第167号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成24年3月21日

イカル



2011. 5. 15 札幌市豊平区西岡公園

撮影者 小松正幸 (札幌市西区)



も く じ

私の探鳥地 (60) 伏古公園 札幌市東区 栗林 宏三	2
利尻島姫沼でササゴイ、アカガシラサギを確認 江別市 富川 徹	3
建物窓へ衝突死したシロハラの一例 酪農学園大学 獣医学類 感染・病理学分野 吉野 智生	4
帯広百年記念館 持田 誠 酪農学園大学 獣医学類 感染・病理学分野 浅川 満彦	
旭川近郊の越冬期オジロワシ・オオワシの移動 日本野鳥の会旭川支部長 柳田 和美	6
オオワシ・オジロワシとの共存を目指して—傷病個体の救護と環境治療の現場から— 猛禽類医学研究所 代表・獣医師 齊藤 慶輔	9
渡り鳥が繋ぐ野幌森林公園と新潟県—2011年、アオジのバンディングから— 北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳	12
探鳥会ほうこく	13
鳥民だより	15
宿泊探鳥会のお知らせ	15
探鳥会 あんない	16

私の探鳥地 (60)

伏 古 公 園

札幌市東区 栗林 宏三

私が紹介する探鳥地は札幌市東区伏古1条2丁目にある伏古公園です。札幌小学校に隣接する周囲1,000mほどの公園です。中央に噴水があり、野球やテニスも楽しめ、地域住民の散歩やジョギングのコースとして親しまれています。

20年前から年間を通して鳥見をしています。住宅街にある公園なので見られる鳥は限られていますが、通年見ることができる鳥はシジュウカラ、ヤマガラ等のカラ類、アカゲラ、ヒヨドリ等です。しかし、春と秋の渡りの季節になるとたくさんの鳥が休息地として利用しています。4月末頃からキビタキ、オオルリなどの夏鳥が見られるようになります。アリスイヤカクコウの姿を見ることがあります。クロツグミが朝早くから木の天辺で大きな声でさえずっていたり、コマドリが岩の上で良い声を聞かせてくれたりと、びっくりする光景に出会うこともあります。

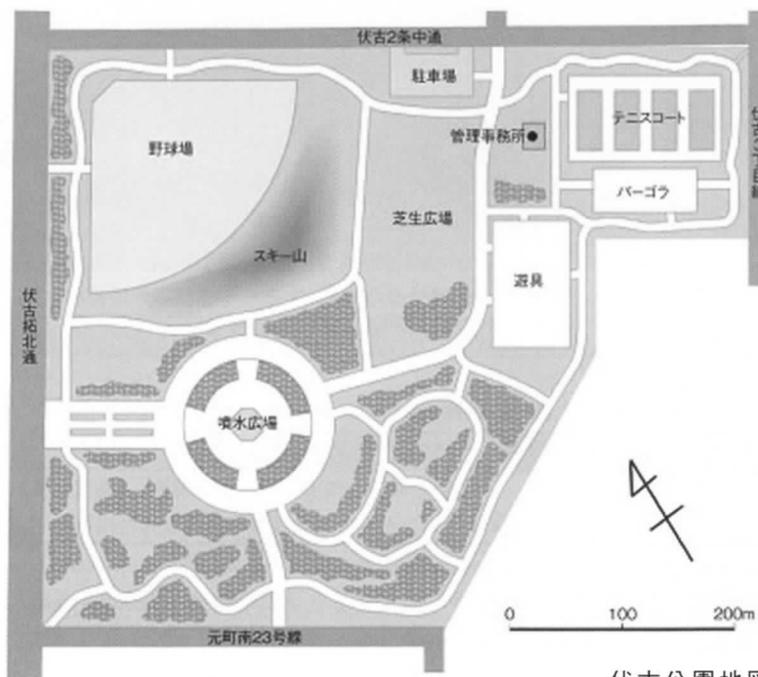
この公園は広葉樹、針葉樹、合わせて30種類以上の木が植えてあり、餌になる木の実が多いので秋の渡りの時や冬場にもいろいろな鳥を見ることができます。アカハラ、マミチャジナイ、コサメビタキは毎年見られます。

その年により変わりますが、白樺にはマヒワ、ベニヒワ、赤松にイスカと言った具合に結構楽しめます。ハイタカがツグミやカラ類を襲うこともあります。

私が公園内で一番気に入っている場所は、噴水広場の南側、樹が多くて少し高くなっている所です。そこには東屋やベンチがありゆっくり見ることができます。小さな藪が何か所もありウグイスやヤブサメを見るポイン

トになっています。すぐ側にある梅やスモモの木には、春にキビタキ、オオルリがよく立ち寄ります。

今までにこの公園で観察できた鳥は70数種になります。水鳥が見られない、しかも住宅街にある公園としてはかなり多いように思います。近年は朝早くから犬の散歩やジョギングをする人が多くなりました。又、ドバトやカラスに餌を与える人がいてカラスの数が増えてきています。小鳥達にはだんだんと悪い環境になってきていますが、これからも、環境の変化と鳥の様子を見比べながら観察していきたいと思っています。



伏古公園地図

利尻島姫沼でササゴイ、アカガシラサギを確認

江別市 富川 徹

このところ道内でもダイサギをはじめ、チュウサギ、コサギなどのいわゆる白サギを見る機会が多くなったと感じるが、他のサギ類についても注意し観察する必要があると思っている。近年、利尻島姫沼を訪れた際に珍しいアカガシラサギとササゴイを確認したので、記録と合わせて状況等について述べてみたい。

北海道におけるササゴイの記録としては、函館、羽幌天売島、根室、網走他、またアカガシラサギは函館、江別野幌森林公園、浦幌十勝太、利尻富士他などがあげられ、これら両種ともに北海道では迷鳥とされている（藤巻 2010）。

ササゴイの確認は、2011年6月7日と8日の2日で、7日（9：44～9：45）は沼の中央部の浮島で休息する1羽の個体を確認するが、すぐに飛び立ち下流方向で見失う。翌8日（9：33～9：42）は、沼の上流側にある浮島辺りを中心に飛翔移動の行動が比較的長く観察され、また写真撮影もできた。本個体は全身が黒褐色で顔から胸にかけて縦班があり、下嘴基部付近の白斑も目立つことから第1回夏羽と判断した（桐原ほか 2000）。両日沼ではカイツブリ、オシドリ、ダイサギ、オオセグロカモメ、ウミネコなどがよく観察された。

アカガシラサギは、2009年6月24日と25日の2日で、24日（11：22）及び25日（10：37）ともに、沼岸と浮島間を飛翔移動する一瞬の行動があったのみで、かろうじて撮影ができたが詳細な観察を行うには至らなかった。映像からは夏羽と分かり赤褐色の頭、黒灰色の背、白色の翼と尾が比較的明瞭なことから成鳥個体と考えられた。沼ではアカエリカイツブリ、ウミネコなどが観察された。

利尻島で記録されているサギ類としては、小杉（2010）によれば本件の2種の他に、サンカノゴイ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、ミゾゴイ、ズグロミゾゴイ、ゴイサギ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、カラシラサギ、アオサギの合計14種にもものほる。これは、北海道の記録16種（藤巻 2010）や日本の記録19種（日本鳥学会 2000）と比べてみても、驚くほどの種数といえる。ほとんどの種は渡り移動途中に立ち寄っていく通過であると考えられるものの、鳥という地理的要因が渡り移動する多くの鳥類において大きな意味があると強く感じている。

なお、アカガシラサギとササゴイの両種を確認したのはいずれも6月で本島の観光シーズンのピーク期である。姫沼は原生林に囲まれた周囲1kmほどであり、立派な木道も整備されて周遊も容易にできることから、バス団体による観光客が次々と訪れ、日中は人が絶えることなく賑わいを

みせる。ウォッチングする自分を含めた多くの観光客の立ち入りが、少なからず沼内の鳥の採餌や休息に影響を与え警戒行動を促すことになり、観光と自然保護をどう両立させるかの課題とその難しさをあらためて実感させられる。



写真1. 浮島から飛び立つササゴイ 2011.6.8



写真2. 沼内を飛翔するアカガシラサギ 2009.6.25

参考文献

- 1) 藤巻裕蔵, 2010. 北海道鳥類目録 改訂3版. 極東鳥類研究会・美唄. 74pp
- 2) 日本鳥学会, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6班. 345pp
- 3) 桐原政志・山形則男・吉野俊幸, 2000. 日本の鳥550 水辺の鳥. 文一総合出版. 352pp
- 4) 小杉和樹, 2010. 利尻島の野鳥リスト. 利尻島自然情報センター. 7pp

建物窓へ衝突死したシロハラの一例

酪農学園大学 獣医学類 感染・病理学分野 吉野 智生
帯広百年記念館 持田 誠
酪農学園大学 獣医学類 感染・病理学分野 浅川 満彦

2010年10月27日午前9時頃、北海道江別市文京台・酪農学園大学構内、本館3階（地上約15m高）会議室、西向き窓（バードセーバー未添付）の網戸に1羽のシロハラが突き刺さっていたところを同大施設管理課職員が発見（図1）、同大野生動物医学センター（WAMC）に連絡した。連絡を受けた吉野が赴き、当該個体を回収した。ここでは、専

いながら、剖検を実施、次所見を得た：雄若鳥、栄養状態普通、体重71g、全長232mm（以下数値単位mm）、翼開長414、自然翼長126、最大翼長127、翼幅86、尾長93、露出嘴峰長17.2、前嘴峰長25.5、嘴高5.6、嘴幅6.3、全頭長48.6、ふ蹠長30.6。体表にIxodes属マダニ寄生確認するが外傷無し。体幹前部硬直を触診で確認。口腔内の血液（お



図1. 酪農学園大学構内の建物の網戸に刺さったシロハラ *Turdus pallidus*
左：その現場風景、右：死体を取り除いた後の穴（矢印；直径約5mm）

門的な立場から、回収死体の学術的処理や、それから得られる様々な知見を紹介するとともに、野鳥の衝突死に関わる私見等を述べる。

当該個体の死亡確認後、WAMCに搬入、カルテ番号AS10413として登録、インフルエンザおよびウエストナイル熱ウイルスの簡易検査キットを用いた検査（吉野ほか2012）で陰性確認後、野生動物生態研究会の諸君に協力してもら

そらく咯血）貯留、上嘴鞘の一部剥離（図2）、頭蓋内出血、叉骨／胸椎骨折、心鬱血、肺出血、気管内血液貯留等、衝突個体に認められる典型所見を呈し（服部・梶ヶ谷2011）、ショックおよび呼吸困難が主因と考えられた。ヒトの死後硬直は2ないし3時間後に開始、上から下半身にかけて進行、約6ないし8時間で完了（石山1978、田中ら2002）。もし、この事例にも外挿可能とするのなら、死後3時間内

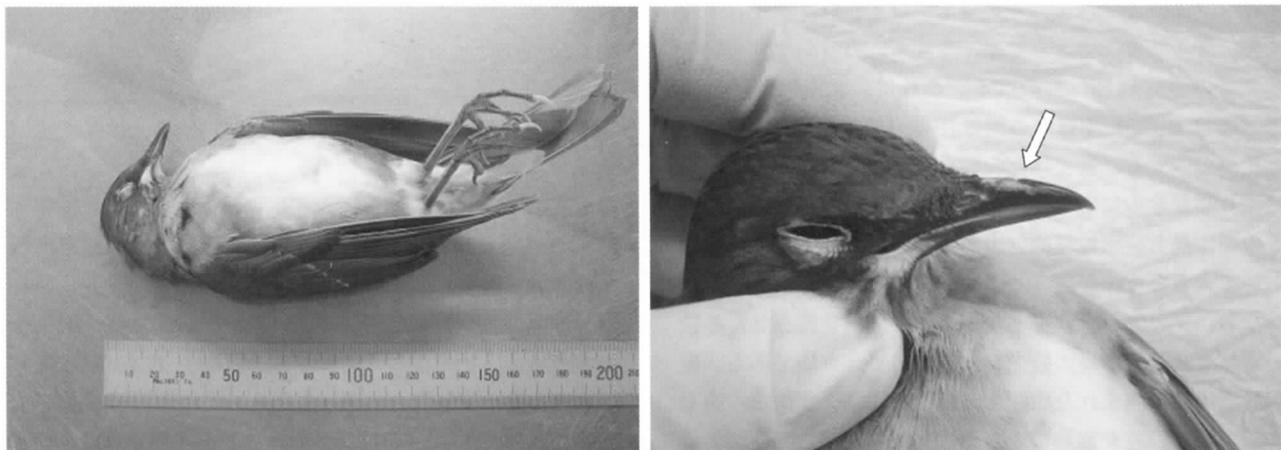


図2. 斃死したシロハラ。左：腹側外貌に明瞭な外傷・骨折等未確認。右：その上嘴の一部剥離（矢印）

外と推定された。

また、消化管の精査により、腸からParuterinidae科条虫とPlagiorhynchidae科鉤頭虫が得られたが（現在、分類中）、いずれも中間宿主（前者は甲虫類/後者は直翅目等）を摂食しなければ感染しない（浅川ら1991）。したがって、このシロハラがこれら節足動物を餌資源として利用していた事が間接的に証明された。

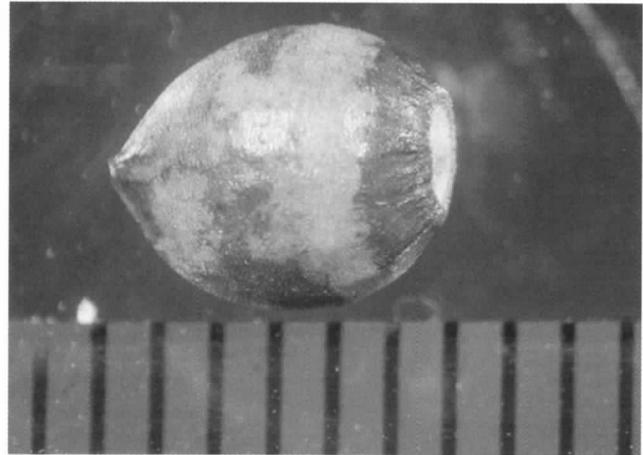


図3. 消化管前部から得た内容物概観（左）と固定されたキャラボク種子標本（右）

今回の事例では、このほか、直接的に食性が判った事例もあり、結局、これが事故原因と想像された。口腔内から胃にかけ果実/種子数個が得られた（図3）。これらを70%エタノール液で固定後、種子については乾燥させ実顕微鏡による形態観察と計測を実施した：種子長径5.6–5.8mm、短径4.4–4.6mm、やや先鋭紡錘形の先端を有し、開孔部を具有する液果肉状部位確認。持田が帯広百年記念館収蔵の果肉・種子標本との比較検査により、当該果実はイチイ *Taxus cuspidata* と同定された。イチイはその種子を包む仮種皮が野鳥により摂食されるので、消化液に対抗するため不透水・硬実性を示す（斎藤1976・1982）。当該大学構内にはミズキ、イタヤカエデ、ヤマモミジ、ヤマグワ、トチノキ、ナナカマド、ハルニレ、シナノキ、アサダ、ハリエンジュ、シラカンバ等樹高約10mの樹木が植林され、特に現場付近はイチイの矮性型変種キャラボク *T. cuspidata* var. *nana* の多数植栽が目立った。ツグミ科はこのような低木で採餌を行うことが多いため、急に飛び立った際等、ガラスや建造物に衝突し易いことはよく知られている（柳川・渋谷1998）。おそらく、本事例もこのようなありふれた普通事例の一つなのであろう。

しかし、当該大学の使命の一つとして環境保全に関する教育・研究を標榜しているので、今後はこのような事故を防ぐ施策が求められよう。当該大学は野幌森林公園に隣接して設置されていることに加え、構内にも前述のように植林樹木も多数ある。そのため、約100種の野鳥がその構内や周辺で記録されているので（藤巻2010、吉野 未発表）、本事例のシロハラだけの問題ではないことは自明である。

たとえば、主要な建物の窓にはバードセーバーを貼る等の野鳥衝突対策をこの機会に検討頂きたい。

サンプルの入手・分析に御協力頂いた酪農学園施設課、野生動物生態研究会各位に深謝する。本研究は平成23年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（酪農学園大学大学院獣医学研究科）の一環で実施された。

文 献

- 浅川満彦・岡田英明・津布楽好則・黒澤 隆. 1991. 内部寄生虫により示唆されたコノハズクの食性に関する一知見. ワイルドライフ・レポート (13) : 8–14.
- 藤巻裕蔵. 2010. 北海道鳥類目録改訂3版. 極東鳥類研究会, 美唄.
- 服部恵子・梶ヶ谷 博. 2011. 野鳥のガラス衝突死体から見えるもの. WRVニュースレター76 : 2–7.
- 石山昱夫. 1978. 法医学ノート. サイエンス社, 東京.
- 斎藤新一郎. 1976. 苗木育成からみた樹木種子の運搬者としての鳥類の役割について. 鳥 25 : 41–46.
- 斎藤新一郎. 1982. 針葉樹のたね. 光珠内季報 54 : 29–35.
- 榊原茂樹. 1983. イチイ種子の動物による消費と散布. 日北支論集 32 : 166–168.
- 田中宣幸・柏村征一・池田典昭ほか. 2002. 学生のための法医学改訂5版. 南山堂, 東京.
- 柳川 久・澁谷辰生. 1998. 北海道東部における鳥類の死因Ⅲ ガラス衝突. 帯大研報 20 : 253–258.
- 吉野智生・中田達哉・浅川満彦. 2012. 交通事故死が示唆された夏鳥アリスイ *Jynx torquilla* の剖検記録とその体表から得られたノミ *Ceratophyllus tribulus* (隱翅目: *Ceratophyllidae* 科) について. 北海道獣医師会雑誌 56 : 印刷中.

吉野智生 現所属：環境省九州地方環境事務所（熊本市）
連絡先著者：浅川満彦

旭川近郊の越冬期オジロワシ・オオワシの移動

日本野鳥の会旭川支部長 柳田和美

【旭川における越冬期オジロワシ・オオワシの歴史】

旭川市でオジロワシが、正式に確認されたのは1974年（昭和49年）3月26日のことであり（『北の野鳥』第7号）、その後越冬期には旭川市廃棄物処分場・石狩川水系を中心に確認されています。



図1. オジロワシ (提供：日本野鳥の会旭川支部 千葉博光)



図2. オオワシ 2011/02/24 旭川市 (提供：千葉博光)

記録以前にもアイヌの古老の話としてオジロワシが飛来していることは推定されていましたが（前掲書『北の野鳥』第7号）、その個体数は不明でした。また、さらに古い時代の文献上の記録は未確認です。

1976年（昭和51年）以降、日本の200海里北洋漁業が急速に衰退したことで、エゾシカの自然死・解体残滓や鳥類・魚類の『餌資源』を求めて内陸への飛来が進んだものと考えられます。

図3は1998年以降のオオワシ・オジロワシ全国一斉調査の旭川近郊におけるオジロワシ・オオワシ越冬数で、全

国の総個体数（2011年2435羽）から見ると、1%弱です。シーズン最大確認数は2007年以前のように30-70数羽台になることはなく、2008-2011年は平均20羽以下で推移しています。

また、2008年以降は新たな観察場所がわかり、観察地点と観察数が増えた時期でもありました。そんな訳で2008-2009年度は観察された最大数13羽（2009/01/25）や全国一斉調査日7羽（2009/02/22）より実数はもっと多かったかもしれません。

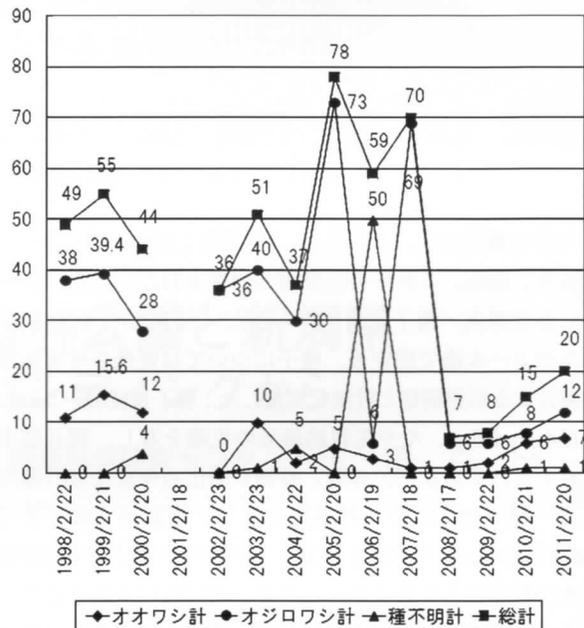


図3. 年度別全国一斉調査日における旭川地区オオワシ・オジロワシ越冬数推移。 ※調査箇所数は年度により変動。2001年度未調査。1998-2004年まで旭川市廃棄物処分場の1ヶ所、2005-2006年3ヶ所、2007-2008年2ヶ所、2009年4ヶ所、2010年6ヶ所、2011年5ヶ所。（提供：日本野鳥の会旭川支部会員による調査結果より）

【2008年以後、旭川市廃棄物処分場における越冬期オジロワシ・オオワシの激減】

旭川市廃棄物処分場では即日覆土（2005）やごみの分別収集の実施（2007）により、オジロワシ等にとって餌条件が急激に『悪化』したと思われる。同時に観察されるトビ（以前確認された数百~1000の確認数）が全く確認されなくなり、カラス類も以前のように推定8000-10000程度（日本野鳥の会旭川支部：猪股照栄氏）いたものが、多くて200-300程度（筆者目視）に激減しました。

図4のように旭川市廃棄物処分場での越冬オジロワシ・

オオワシの観察例が2008年以降極端に減少し、場合によっては観察されない場合のほうが多くなっています。また飛来しても以前のように樹上などに留まることはほとんどありません。これに反して、石狩川水系やその他の農畜産廃棄物施設での確認数が2008年以降増加しました。

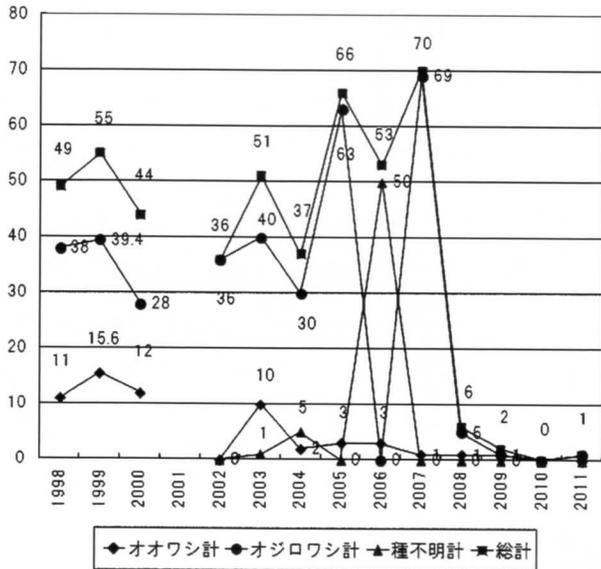


図4. 旭川市廃棄物処分場のオオワシ・オジロワシ観察個体数推移。2001年は会行事と重複のため別日程調査は未採用。2003年まで旧旭川市廃棄物処分場(中園)。2004年以降旭川市廃棄物処分場(芳野)

【旭川地区のオジロワシ・オオワシの最大観察数は2月下旬】

旭川市廃棄物処分場でのオジロワシ類の観察数が2008年以降減少してから、どこにオオワシ・オジロワシが移動したのかを探る要素もありましたが、年々確認数・確認場所が増加傾向にあります。同じ冬季間においても個体数の変動があり、2009-2010、2010-2011年越冬数は図5、6のように推移しています。

2月下旬頃に旭川地区では越冬数が最大数に達するものと推定しています。

ちなみに、蛇足ですがこの2月下旬は旭川地区におけるカラス生息実態調査(2010、2011年のねぐら調査)によるカラスの最大観察数の時期と偶然一致します。この時期のカラスは東川町、比布町、鷹栖町、愛別町など近郊の町村にカラスのねぐらがなく、上川盆地の多くのカラスが旭川市に集中すると思われます。この調査は日本野鳥の会旭川支部が旭川市の委託を受けて調査したもので、カラス調査の結果は表1、2の通りです。

カラスの最大観察数は、市役所周辺冬ねぐらでは2010/02/22の2873羽でした。また、外国樹種見本林周辺冬ねぐらでは2011/02/08の6504羽で、2/22にはそれに近い6411羽でした。

このように、オジロワシ・オオワシの最大確認時期とカ

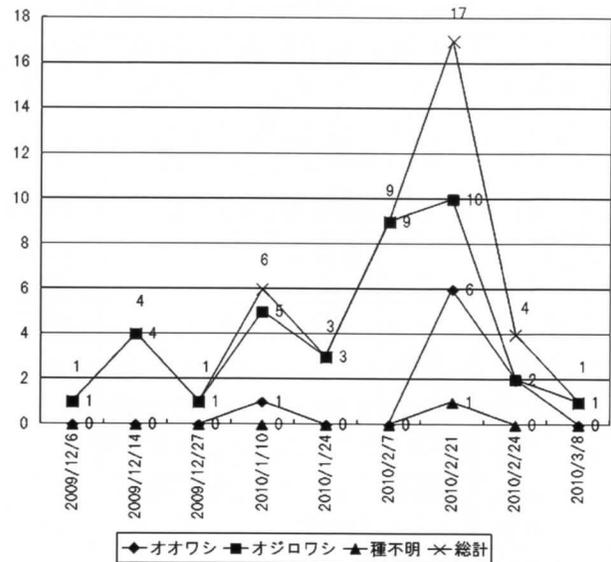


図5. 2009-2011旭川地区越冬個体数。(提供:支部 若林秀男・ちづ子, 柳田和美・弘子)

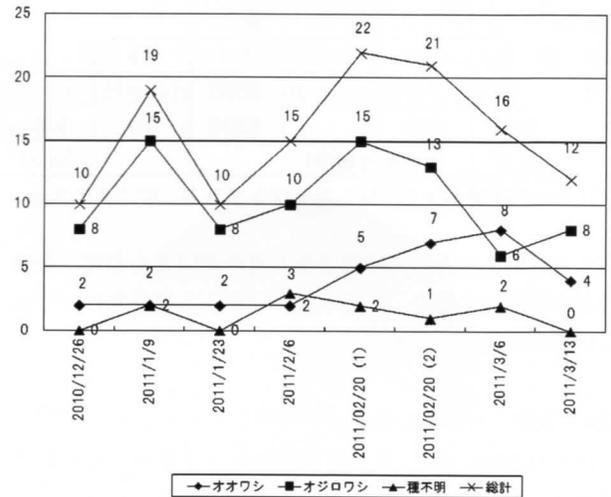


図6. 2010-2011旭川地区越冬個体数。支部調査時間は原則として7:00-9:00であるが、2011/02/20のグラフは(1)7:00-9:00の支部調査時間、(2)全国一斉調査時間9:00-11:00の調査時間帯別に表している。(提供:支部 竹田憲正、富田恭司・和子、内田房子、千葉博光、島田芳郎、若林秀男・ちづ子、柳田和美・弘子)

ラスの最大生息数確認時期が旭川地区では一致するのが面白い現象です。例年の最厳寒期(今年は1月から寒いのですが)にあたりますが、関連は不明です。ただし、カラス調査データは2シーズンのみなので、偶然という見方もあるかもしれません。

オオワシ・オジロワシについては2009-2010年も新たな観察場所を求めて、石狩川本流・水系を旭川市内の上流まで調査してみました。旭川市内中心部に近づくにつれて、観察個体はいるものの、その個体数はせいぜい0-2羽と少なく、0羽の場合も少なくありません。中州や河畔林の

表1. 2010年旭川市役所周辺冬ねぐら(埜)調査結果

日	1月22日	1月23日	1月27日	1月28日	1月31日	2月18日	2月22日	3月15日	3月23日
調査種類	追加	追加	追加	追加	追加	予備	本	追加	本
カウント数	500	1500	1511	1699	2731	1873	2873	1316	1531

本：本調査、予備：予備調査、追加：追加調査

表2. 2011年旭川外国樹種見本林周辺冬ねぐら(埜)調査結果

種名	1月11日			1月18日			1月25日			1月31日		
	C	M	U	C	M	U	C	M	U	C	M	U
針葉樹		100	333		45	650		1	574	40	1050	
広葉樹	100		10			185	7		330	710		
樹木不明												1161
電線等	1923			666		200	253	2		419		
飛翔			3229			3104			2991			2504
小計	2023	100	3572	666	45	4139	260	3	3895	1169	1050	3665
合計	5695			4850			4158			5884		

種名	2月8日			2月15日			2月22日			2月28日		
	C	M	U	C	M	U	C	M	U	C	M	U
針葉樹			352		130	199		346	25		35	448
広葉樹				56			140			402		
樹木不明			2058									65
電線等	219			14			12			115		
飛翔			3875			4817			5888			5125
小計	219		6285	70	130	5016	152	346	5913	517	35	5638
合計	6504			5216			6411			6190		

C：ハシボンガラス M：ハシブトガラス U：カラスsp

高木(ドロノキ等)で確認される場合がほとんどで、かつ飛翔中のものも多く、その状況は現在もあまり変わらないように思われます。

【旭川近郊における越冬期オジロワシ・オオワシの傾向】

図8は2008-2011年の富良野地区の冬季越冬個体数推移です。2008-2009年は8回調査、それ以外は全国一斉調査日と同じでした。

旭川地区よりも最大数の確認が2週間程度遅れる場合があります。またデータは少ないのですが、3月初旬にオオワシの渡り時期と重なっているためか、総個体数に占めるオオワシの比率・個体数が多いのが特徴です。エゾシカ残

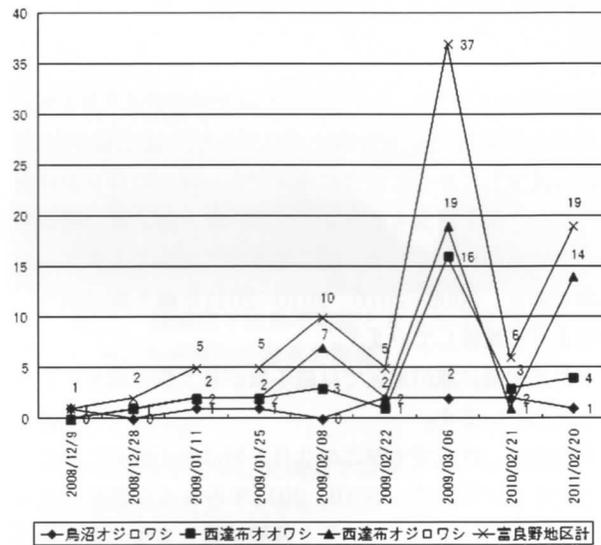


図8. 2008-2011年の富良野地区の冬季越冬個体数推移。(提供：日本野鳥の会 大吉五夫・信子)

滓が強く示唆されていますので、関連があるのかもしれませんが。

以上、旭川とその近郊ではオオワシ・オジロワシの確認できるポイントが限定されることと、調査要員に限りがあることからすべてを調査できているわけではありませんが、おおよその傾向は把握できるものと思います。



図7. 旭川市カラス生息実態調査中 (提供：千葉博光)

オオワシ・オジロワシとの共存を目指して — 傷病個体の救護と環境治療の現場から —

猛禽類医学研究所 代表・獣医師 齊藤慶輔

猛禽類医学研究所は、北海道釧路市にある環境省釧路湿原野生生物保護センターを拠点に、新しい獣医学分野「保全医学」の立場からシマフクロウ (*Ketupa blakistoni*) やオオワシ (*Haliaeetus pelagicus*)、オジロワシ (*Haliaeetus albicilla*) などの希少猛禽類の救護や保護・研究活動を行っています。センターには生体だけでなく、その数を遙かに上回る死亡個体も収容されており、疾病・死亡原因の究明は、傷病鳥の診察や死体の病理学的検査によって行われています（環境省委託事業）。テンやキツネによる幼弱個体の捕食や感染症などによる自然死も確認されていますが、収容原因の多くは事故や中毒など、何らかの形で人間活動が関与しているものがほとんどです。

人間生活に起因する事故や環境汚染は、短期間のうちに野生動物の大量死をもたらす危険性があることから、人間が責任を持って軽減・排除すべきで、傷病個体の救護活動はこれが達成されるまでの“補償”であるとも言えるのです。また救護活動の過程で、被害に遭った個体を精査することによって発生状況を推察し、その原因や誘発要因を排除する、いわゆる“事故の元栓を閉める”という取り組みを行うことが極めて重要です。

オオワシやオジロワシの傷病・死亡原因としては、車や列車による交通事故や感電、発電用風車との衝突、鉛中毒などが多く、密猟などによる直接的な被害も確認されています（図1、図2）。

交通事故

オオワシやオジロワシの交通事故は自動車もしくは列車との衝突によるもので、1999年から2012年2月までの間に、オオワシで25件（車14、列車11）、オジロワシでは46件（車30、列車16）が、これらの種の採餌場になっている水辺や森林に隣接した地域で頻発しています。交通事故に遭った個体の多くは体躯や上半身を重度に負傷していたことから、路面に降りているところをはねられた可能性が高いと思われました。本来なら高いところに止まることが多い猛禽類が地上に降りるからには、何か理由があるに違いありません。オオワシやオジロワシは未消化物をペレットと呼ばれる塊として吐き出す習性がありますが、保護収容されたワシが最初に出すペレットは、事故に遭う前に個体が採食していた物でできています。交通事故でセンターに搬入されたワシの多くは、大量のエゾシカの体毛からなるペレットを吐き出します。また、死亡した猛禽類のそ囊や胃からも、未消化のシカの肉や体毛が頻りに検出されることから、

これらの鳥が事故に遭う直前に、これらの死肉を食べていたと思われました。近年頻発しているワシと列車の衝突事故でも、同じような現象が見られることから、列車にはねられたエゾシカの死体が線路上もしくは線路脇に放置され、それを求めて集まった猛禽類が二次被害に遭っていると思われました。実際に列車に乗り込んで調査を行ったところ、線路上でエゾシカの死体を夢中で食べるオオワシやオジロワシの姿を何度も目撃することができました（図3）。

2000年から2012年2月までの間に、オオワシで10件、オジロワシでは16件の列車事故が確認されており、そのほとんどが即死しています。餌資源が限られる厳冬期において、シカの糞死体が頻りに供給される線路沿いの環境は、良好な餌場としてワシ類に多用されていると考えられ、報告や回収がなされていない被害鳥も数多く存在すると思われます。

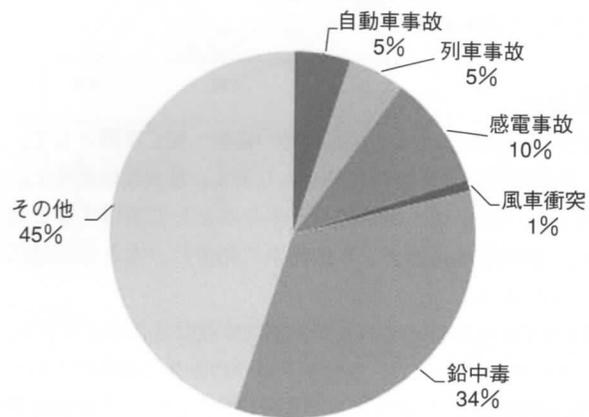


図1. 平成12年～21年度の10年間におけるオオワシの死亡・傷病原因 (n=165)

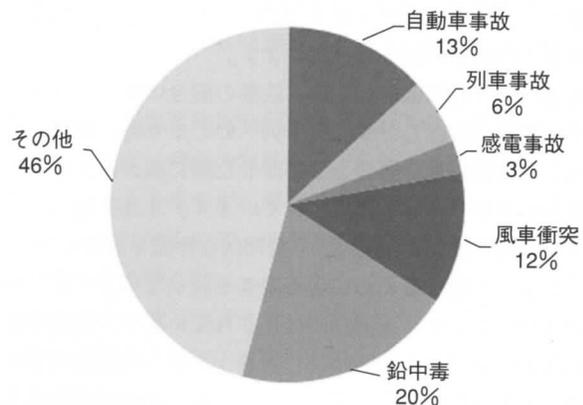


図2. 平成12年～21年度の10年間におけるオジロワシの死亡・傷病原因 (n=182)



図3. 線路脇に放置されたシカの轢死体に群がるオオワシとオジロワシ

ワシ類の列車事故を防ぐためには、シカと接触した列車は速やかに事故の発生地点を管理部署に通報するとともに、シカの轢死体を線路脇に移動させるだけではなく、現場から完全に撤去することが求められます。速やかな撤去が難しい場合、シカの死体を可能な限り線路から遠ざけるとともに、応急処置としてブルーシートなどでシカの死体を覆い隠し、ワシの目に付きにくくする対策も一定の効果が期待できると思われれます。

感電事故

近年増加傾向にある大型猛禽類の傷病・死亡原因として、送・配電設備による感電事故があります。猛禽類は習性上、見晴らしの良い送・配電柱をとまり木として多用することから、感電事故は過去より世界中で発生し、大きな問題になっています。

1999年から2012年2月までに道内で収容されたオオワシ、オジロワシ、クマタカ、シマフクロウの生体と死体のうち、感電と診断された事例は43件にのぼります。感電事故の発生は2004年が7件と最も多く、現在も収容される可能性のある2012年を除き、年平均で3.3件発生しています。感電によって死亡した希少猛禽類は、オオワシ(48%)が最も多く、次いでシマフクロウ(23%)、オジロワシ(18%)、クマタカ(10%)の順となっています。

感電に至った経緯としては、鉄塔の腕金に留まろうとした際に電線に接近したり、碍子列へのとまり時に通電部と接触した事例の他、腕金上で排泄した際に尿が電動路となり感電するケース等も確認されています。北海道電力(株)では、感電事故などに起因する瞬間的な停電を感知した際、その原因を究明するために現地調査を行っています。多くの事例でこの時に被害鳥が発見されています。電線や鉄塔の電気が出入した箇所には、金属が融解した痕跡(アーク痕)がみられることが多く、一方で感電個体の電流出入部には、皮膚や羽毛に重度の火傷が生じます。これら電気設備と被害鳥から得られた情報を元に、事故の状況や発生

場所、鳥の姿勢や通電部位などを把握することは、再発防止策や予防策を考える上で重要な手掛かりとなります。

感電事故の防止には、鉄塔と電線間、もしくは電線同士の間隔を、鳥が翼を広げた長さ(翼開長)や嘴の先から尾までの長さ(全長)よりも長く確保する必要があります。新設する送・配電設備に対しては、周辺域における大型猛禽類の生息状況を把握し、これらの種が電力柱にとまった際にも安全が確保されるような設計を採用することが望まれます。特に北海道では、電線間や電線・塔体間の距離が短い66kvの送電鉄塔およびパンザマスト、配線柱で感電事故が多発しており、大型猛禽類の生息を考慮した根本的な構造の改良が望まれます。

一方、既存の送・配電設備に対しては、猛禽類を危険な場所に接近させないための器具や安全なとまり木を設置し誘導する等の対策が必要となります。猛禽類医学研究所では、電力会社の協力の下、感電防止器具の開発や有効性の検証を、後遺症などにより放鳥不可能となった大型猛禽類を用いて実施しており(図4)、成果のあった物は運用中の送・配電柱に採用されています。事故発生箇所のほか、類似の構造物に対しても事前の予防策を講ずることが極めて重要です。



図4. 後遺症で放鳥不可能となったオオワシを用いた感電防止器具の開発

銃弾による鉛中毒

1990年代後半より、北海道ではオオワシやオジロワシの鉛中毒死が相次ぎ、大きな社会問題になりました。狩猟で射止められたシカは通常その場で解体されますが、被弾した部分は食用に適さないため、山野に放置されることも少なくありません。これらの死体の被弾部には鉛弾の破片が数多く残っており、オオワシやオジロワシがシカ肉とともに食べることによって重篤な鉛中毒に陥っているのです。鉛弾による鉛中毒死は1996年に最初に発見されて以来、2011年末までに130例が確認されています。これらの多くが、山菜採りや釣り人によって偶然発見されたワシの死体によって鉛中毒であると診断された数であることを忘れてはなりません。人間がめったに足を踏み入れることのない

厳冬期の山中で、発見されることもなく消失してしまった死体も多いと思われることから、実際の死亡数ははるかに多いと思われます。

ワシ類の鉛中毒の特徴として、繁殖年齢に達した成鳥が数多く犠牲になっていることがあげられます。この傾向は、若いワシよりも生態的に優位な彼らが真っ先に新鮮な放置残滓を独占し、鉛を多く含む被弾部の肉を口にする機会がより多かったことが原因になっていると考えられます。自然界の中で生き残る術を身につけているはずの成鳥が、鉛によって数多く命を落としていることで、単に1羽のワシの死亡のみならず、結果的にこの個体が生み出すはずだった次世代の減少にまで影響が波及することが心配されたのです。

これに対し、北海道は鳥獣保護法に基づく告示という形で2000年度の猟期からエゾシカ猟における鉛ライフル弾の使用規制を開始し、さらに翌2001年度より、シカ猟用鉛散弾の規制にも踏み切りました。また2003年度には、狩猟によって発生する獲物の放棄についても規制が加えられることとなり、さらに2004年度からは、ヒグマ猟を含むすべての大型獣の狩猟を対象に道内での鉛弾が使用禁止となったのです。

しかしながら、エゾシカ猟で鉛弾の使用が禁止された2000年から2012年2月までに、58羽のオオワシと22羽のオジロワシが高濃度の鉛に汚染された生体や死体としてセンターに搬入されており、実際にはこの何倍もの猛禽類がいまだに深刻な鉛被害に遭っていると考えられます。2011年12月にも、道東の浦幌町と鶴居村から衰弱したオオワシとオジロワシが立て続けにセンターに運び込まれました。血液中の鉛濃度を測ったところ、検査機器の計測限界を超えるほどの高い値を示し、重度の鉛中毒症と診断されました(図5)。ただちに点滴などで解毒剤を投与しましたが、残念ながら2羽とも翌朝までに死亡してしまいました。この症例でも、死亡したワシの胃からエゾシカの体毛と鉛片が発見され、狩猟で撃たれたシカの死体をワシが食べ、肉などに含まれる鉛ライフル弾の破片を飲み込んで中毒に陥っ



図5. 重度の鉛中毒症に陥ったオオワシ(2011年12月)

たとえられました。

鉛弾の規制が開始されてから、すでに12年も経ちますが、いまだに鉛弾を使用しているハンターが存在していることが裏付けられました。北海道で鉛弾の規制が遵守されない背景には、本州以南では鉛による野生動物への大きな実害が報告されておらず、鉛ライフル弾などの使用が禁止されていない現状があります。これらの地域から北海道にシカ撃ちに来るハンターが、鉛弾を持ち込んで使用している可能性も指摘されています。また、たとえ鉛弾を使用しても現行犯以外は取り締ることができない現状も、鉛中毒の発生に歯止めが掛からない大きな要因となっています。

オオワシやオジロワシの多くは、冬鳥としてロシア・サハリン経由で北海道に渡来します。サハリンでワシ類が鉛弾を口にし、北海道で鉛中毒を発症する可能性を探るため、ロシア当局に聞き取り調査をしてみました。サハリン州森林特別保護自然地域局のアンドレイ・ズドリコフ部長によると、サハリンのハンター人口は約2万人。5月と、8月末から11月まで、水鳥や小型毛皮獣、クマなどの銃猟が有料で行われ、射止めた獲物は通常丸ごと持ち帰られているそうです。また、一般的には鉛弾が使用されているものの、サハリンには大型のシカは生息しておらず、野生化したトナカイ(家畜として移入されたもの)が少数見られるものの狩猟は禁止されているとのことでした。

鉛弾の誤食による野生動物の鉛中毒を根絶するためには、全国規模で鉛弾を規制し、無毒の銅弾などに移行すること以外に根本的な方法は無いと思われます。鉛弾で撃たれたものの致命傷とはならず、逃げ延びた獲物がどこか別の場所で死に、これを食べた他の動物が鉛中毒を引き起こす可能性があるからです。

鉛弾の規制が遵守されていない現状を打破するためにも、鉛弾をカスミ網などと同様の「特殊猟具」扱いにし、使用のみならず、流通や所持に関しても原則的に規制することが望まれます。さらに、狩猟を目的とした鉛弾の道内への持ち込みを規制し、空港や港湾などで水際の取り締まりを強化することも大変有意義だと思われます。

鉛中毒の根絶を実現することができる唯一の抜本的な対策は、全国規模ですべての狩猟から鉛弾を撤廃することです。これ以上無駄な犠牲を増やさないために、早急に実現されるよう、引き続き各所に働きかけて行きたいと思えます。

傷病野生動物は、バランスが崩れた自然環境の姿を、身を呈して伝えてくれるメッセンジャーです。彼らが傷つく原因のほとんどは、残念なことに何らかの形で人間が関与しています。変わりゆく自然の中、時には人間が作り出したものを自らの生活に取り入れて命をつなぐ彼らは、その代償として事故や中毒に遭っています。一方、多くの原因に人間が関与しているが故に、至ったプロセスや誘発原因が明らかになった場合には、速やかに対処することによって発生件数を短期間のうちに減少させることができる

とも言えるのです。国民一人ひとりが野生動物と共に生きていることを自覚し、人間社会が作り出している彼らへの軋轢を人間が責任を持って排除する「環境治療」に、各々が出来る範囲で参加してくれることを心から願っています。

参考・引用文献

- 1) 齊藤慶輔. 北海道における大型希少猛禽類の事故およびその対策—特に交通事故と感電事故について—。モーリー 21, pp.26-29. 北海道新聞野生生物基金 (2009)
- 2) 齊藤慶輔. 禁止されても無くならない不思議 鉛弾中毒死問題. FAURA 14. pp.26-27. ナチュラリー編集部. (2006)
- 3) 齊藤慶輔, 渡辺有希子, 黒沢信道. 風力発電施設へのオジロワシの衝突事故—現状とその傾向—. 北海道地区三学会. 講演要旨集. (2008)
- 4) Saito K. 2008. Lead poisoning of Steller's Sea Eagle (*Haliaeetus pelagicus*) and White-tailed Eagle (*Haliaeetus albicilla*) caused by the ingestion of lead bullets and slugs, in Hokkaido Japan. "Ingestion of spent lead from ammunition" Conference Abstracts. pp.302-309. The Peregrine Fund. Boise States University, Idaho.

- 5) Saito K, Kurosawa N, Ryoji Shimura. 2000. Lead poisoning in endangered sea-eagles (*Haliaeetus albicilla*, *Haliaeetus pelagicus*) in eastern Hokkaido through ingestion of shot Sika deer (*Cervus nippon*). Raptor Biomedicine III including Bibliography of Diseases of Birds of Prey. pp.163-166. Zoological Education Network, Inc., Florida.
- 6) 齊藤慶輔. 鉛中毒から猛禽類を守る—オオワシ—. 155-177. 日本の希少鳥類を守る. 京都大学出版 (2009)
- 7) 齊藤慶輔, 渡辺有希子. 日本野生動物医学会誌. Vol.11, No.1. pp.1-17. 北海道における希少猛禽類の感電事故とその対策. (2006)
- 8) 齊藤慶輔. 獣医師は野生動物の保全に何をすべきか. 市民公開野生動物フォーラム. 第31回動物臨床医学会年次大会. 要旨集. (2010).
- 9) 齊藤慶輔. 傷病希少猛禽類からのメッセージ. JVM. Vol.64. No.6. 文永堂出版 (2011)
- 10) 齊藤慶輔. 読売新聞. 遠望眺望. ワシの鉛中毒死. (2012)

〒084-0922 北海道釧路市北斗2-2101

環境省釧路湿原野生生物保護センター内

<http://www.irbj.net/>

渡り鳥が繋ぐ野幌森林公園と新潟県 —2011年、アオジのバンディングから—

北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 玉田 克巳

2011年秋も野幌森林公園のほぼ中央部で鳥類標識調査(バンディング)を行った。この秋はちょっとした成果を得たので報告したい。バンディングとは、生捕りした鳥に、番号などが刻印された金属の足環をつけて放し、渡りの経路などを調べるための調査である。環境省から許可を受けて行うものであるが、通常小鳥の捕獲にはカスミ網を使う。調査自体は環境省が山階鳥類研究所に委託して展開している事業で、我々標識調査員(バンダー)は、山階鳥類研究所からリングやカスミ網を貸与されている。渡り鳥は春に北上し、秋に南下する。よって春と秋には動きが活発になり、多くの鳥の捕獲が見込める。しかし、経験的に春の捕獲数はあまり多くない。小鳥類を目的としたバンディングの最盛期は秋、9月後半から10月である。

私は、2008年から野幌森林公園でバンディングをはじめているが、初年度の2008年は予備的な調査として2日間調査しただけで、本格的な調査をはじめたのは2009年からである。2009年と2010年は、同時にほかのことも調べていたので、張るカスミ網の枚数も2枚におさえ、放鳥数は年間約500羽程度であった。2011年は、網を6枚に増

やし、アオジ1,000羽放鳥を目標に調査に挑んだ。捕獲したアオジは938羽。この中には、すでにリングのついた再捕獲の個体が25羽含まれており、ほとんどは、今年あるいは過去に野幌森林公園で放鳥した鳥であった。ところが10月9日に捕獲した1羽は、近くで調査をしているバン



写真1. 新潟で放鳥され、野幌森林公園で再捕獲されたアオジのオス

ダー仲間連絡しても、放鳥状況がわからず、どうやら札幌幌隈で放鳥した個体ではないらしいことがわかってきた(写真1)。リングを管理している山階鳥類研究所に照会すると、新潟のバンダーが管理しているリングであることわかり、そのバンダーに連絡をとると、この個体は、2011年4月22日に新潟県の関屋海岸で放鳥されたアオジ(オス、成鳥)として放鳥された個体であることが明らかになった。新潟県関屋海岸と野幌森林公園は直線距離で約610km離



図1. 放鳥地点と再捕獲地点

れている(図1)。放鳥から再捕獲まで約5ヵ月半である。さて、この新潟で放鳥され野幌で再捕獲された個体について、どのような意味があるのか少し考えてみたい。新潟で放鳥されたのは4月なので、すでに春の移動期である。この個体が新潟で越冬したのか、新潟より南の地域で越冬したのかは定かではない。また再捕獲されたのも10月なので、野幌で夏をすごしたのか、野幌より北の地域にいたのかもわからない。例年、野幌森林公園におけるアオジの初認は4月20日ごろで、オスが先に渡ってくる。2011年に私が野幌で確認したアオジの初認は4月19日であった。つまり、この個体が新潟で捕獲されているところに、北海道では各地からアオジの初認記録があったはずである。新潟から北海道まで何日かけて渡っ

てくるのかわからないが、決して早く渡ってくる個体ではないことは確かである。

アオジは北海道を含む北日本で繁殖し、本州以西で越冬している。このため春に本州以西から北日本に移動し、秋に南下することは既知のことで、過去の標識調査の結果でも同じリングのついた個体が北海道と本州で捕獲された例はたくさんある。よって、今回のことが、ことさら珍しいことではない。しかし、どのぐらい珍しいことかを調べてみる。1961~1995年までの標識調査の結果をまとめた鳥類アトラス(山階鳥類研究所 2002)では、35年の間に、5km以上離れた地点で再捕獲されたアオジは795件ある。このうち、さらに50km以上離れた地点で再捕獲されたアオジは302件である。110件は秋(9~11月)に放鳥され、同じ年の秋に回収されたものである。これに比べて、春(3~5月)に放鳥され、50km以上羽離れた地点で6ヶ月以内の秋に回収された個体は、わずか2件である。鳥類アトラスで取り扱っている最終年の1995年からすでに15年以上経過していて、この15年間の記録がどうなっているか、今調べがつかない。春に放鳥され6ヶ月以内の秋に回収された例はあまり多くない。

放鳥時期も、回収時期も移動期であるので、越冬地と繁殖地を直接結ぶ証拠とはいえない。しかし、野幌森林公園でアオジのオスが初認される4月に、新潟を飛び立ったアオジが、秋に野幌森林公園にいたことは確かな証として明らかにできたものと思う。

資料

山階鳥類研究所(2002)鳥類アトラス鳥類回収記録解析報告書(1961-1995). 環境省自然環境局野生生物課・環境省自然環境局生物多様性センター

畑 正輔、樋口孝城、広木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、村木敬太郎、山本昌子、横山加奈子、吉川茂子

以上30名

【担当幹事】道場 優、松原寛直



野幌森林公園

2011. 11. 6

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ハクチョウsp. (オオハクチョウまたはコハクチョウ)、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、アカハラ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、カケス、ハシブトガラス

以上26種

【参加者】青山和正、秋田雅雄、石井正訓、伊藤信治、井上詳子、内山恭子、大表順子、太田敏枝、北川博一、栗林宏三、後藤義民、品川陸生、清水朋子、高田征男、竹田芳範、辻 雅司・方子、道場 優、戸津高保、野田貴代子、

ウトナイ湖

2011. 11. 13

札幌市北区 北山 政人

日増しに季節の移ろいを感じられる秋の日の、ウトナイ湖の探鳥会でした。春と比べるとハクチョウ類、ガン類、カモ類は、あまり長居せず南へ向かう傾向もあります。また日中は餌を求めて出かけているものも多く、湖面にみられるものは種類も数も少ないので、少々寂しい雰囲気もあります。しかし、遠い場所も、くまなく望遠鏡でじっくり探して見ると意外に多くの鳥たちを確認できます。最近純粋に野鳥観察をしている方は少なくなり、手軽にデジ

タル一眼レフのカメラが持てる時代なので、撮影派の人口の方が多く思えます。自分も写真を撮っていますが、観察派の方が長いので、鳥を識別する楽しさや難しさは、ある程度解っていると思っています。最近よく思うのは、鳥や自然の事を理解しようとせずに、ただ被写体としてのみ見ている、そういう方々が増えている気がします。とても残念です。この日、カモ類の雄の多くは、春先のような綺麗な繁殖羽ではなく、地味な雌のような羽衣で、見慣れていない方にとっては識別が難しい状況です。それでも個体差によって、同じ種でも早く綺麗な雄になっている個体があります。また、ホシハジロのように、種類によっては早めに換羽が進んでいる雄の個体が多いのもいます。夏から秋にかけての雄の地味な羽衣の事をエクリプスと言いますが、厳密に言うと、この日の探鳥会の時期だと、多くの雄は完全なエクリプスの羽衣ではなく、繁殖羽への換羽中の個体と言った方が正確です。昔はウトナイ湖での観察例が少なかったダイサギや、近年苫小牧で急激に個体数の増えたカササギ、全道的に増えているカワウも観察しました。この日、いちばん印象深い事は、大空を高く舞って行ったケアシノスリを見た事です。探鳥会も終盤にせまった、お昼前の空に、見る見る高度を上げて行きました。獲物を求めて高度をかせいでいたのではなく、長距離を移動していく渡りの飛行でした。尾羽の先の黒い、はっきりとした横帯、ノスリと比べると全体に白色味が強いです。日本には冬鳥として渡来し、数は多くはありませんが、主に北海道をはじめ、北日本で見られます。ウトナイ湖の周辺でも、毎年見られていると思われれます。個人的には、越冬地での観察が主で、渡りの観察例は少ないので、この日のケアシノスリの行動を見られた事は、嬉しいです。

【記録された鳥】カイツブリ、カワウ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ケアシノスリ、オオハクチョウ、コブハクチョウ、マガン、ヒシクイ、マガモ、ヒドリガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ホシハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、カササギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上29種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、大島 武、大表順子、太田敏枝、加藤茜湖、門村徳男、北山政人、後藤義民、小堀煌治、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、田中 陽・雅子、戸津高保、内木克巳、中正憲信、野田貴代子、畑 正輔、本間康裕、松原寛直、村木敬太郎、山口ちひろ、山下富雄、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸

以上30名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

野幌森林公園

2011.12.4

【記録された鳥】トビ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、エ

ナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アトリ、ハシブトガラス 以上12種

【参加者】内山恭子、太田敏枝、川村宣子、グロース千鶴子、後藤義民、小堀煌治、坂井伍一、品川睦生、中正憲信、畑 正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦子、横山加奈子、吉川茂子 以上15名

【担当幹事】坂井伍一、中正憲信

小樽港

2012. 1. 15

札幌市中央区 金内 博子

今回、初めて友人に誘われて参加しました。訳も分からず山野草の会で一緒に道場さん、中正さんにお会いできるし。私の父も旭川で野鳥の会のメンバーだし、どんなのか行ってみようと思立ったのです。小樽港なら寒いと思い、もうこれ以上着られないと言う程着込んでバスに乗ったので、バスの中は暑くて暑くて具合悪くなる寸前に小樽駅に着きほっとしたスタートでした。

最初は日和山灯台に……。なんとちょっとした山登りからで驚きました。いったい何がいるんだろう？と皆が指す方向へ持参したオペラグラスで見たがさっぱりで、何か飛んでいるという事だけ分かる有様でした。会員の方が皆親切で望遠鏡を覗かせてもらおうと、鳥の色まではっきり見えるではありませんか！まるで大人と子供の違いの望遠鏡でなにかもビックリでした。オジロワシはオホーツクの流水の上で以前見た事がありました。小樽で見ることが出来た感激でした。

祝津、高島港では少し鳥を見る事になれて鴨がこんなに沢山の種類がある事にまたまた驚きでした。中でも、ウミアイサを仲間が勝手に別名ベッカムと付けましたが、とても頭の毛がカッコ良くとても気に入りました。ハブニングは高島港で蟹気楼が見えた事です。UFO、オーロラなどとても興味がある私なので蟹気楼が見えたのは大感激でした。

帰りのバスの中で、会員の方達が見た野鳥の数を聞き、こんなに小樽港で見ることが出来るのだと知り、今まで知らなかった世界を覗いた思いでした。会員の皆さんとても親切な方達ばかりで初めての参加でも、とてもいい思いをさせて頂きました。ありがとうございます。又機会があれば参加させていただきます。

【記録された鳥】オオハム、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、マガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、トビ、オジロワシ、オオワシ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、カモメ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、ウミスズメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハギマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上31種

【参加者】飯田睦子、石田卓也、岩崎孝博、白田 正、内山恭子、大表順子、大阪博記、大島 武、岡部良雄・三冬、

金内博子、栗林宏三、坂井伍一・俊子、坂田真理子、志田博明、品川睦生、島田芳郎・陽子、鈴木幸弥・順子、高橋良直、高橋きよ子、立田節子、道場 優、戸津高保、中正憲信・弘子、中田勝義、西尾京子、畑 正輔、濱野由美子、樋口孝城、平林寿々、広木朋子、本間康裕、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、渡会やよひ 以上41名

【担当幹事】道場 優、畑 正輔、樋口孝城

野幌森林公園

2012.2.5

【記録された鳥】トビ、オジロワシ、ヤマゲラ、クマガラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アトリ、カワラヒワ、ウソ、シメ、カケス、ハシブトガラス 以上23種

【参加者】秋山洋子、伊藤信治、今村三枝子、内山英晋、大表順子、太田敏枝、栗林宏三、グローズ千鶴子、後藤義民、品川睦生、道場 優、中正憲信、戸津高保、畑 正輔、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、吉田慶子 以上21名

【担当幹事】道場 優、松原寛直

鳥民だより

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

これまでの光映堂が3月末をもって閉鎖となりますので、会場が変更になります。

会場：北電ギャラリー

札幌市中央区大通東1丁目 北海道電力本店1階
地下鉄東西線バスセンター前駅2番出口すぐ

期間：平成24年5月7日(月)～5月17日(木)

9:00～18:00

ただし、土・日は閉館となりますのでご注意ください。

・写真は最近3年以内に北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を必ず添付して下さい。

・4月30日までに愛護会事務所(北海道自然保護協会)に送付あるいは直接届けて下さい。

(直接持参の方は4月27日までにお願いします)

・5月2日に事務所で額付・加工・キャプション作成などを行い、7日に会場にて展示作業を行います。お手すきの方はご協力下さい。

なお、引き続き野幌自然交流館で6月に開催を計画いたしております。

問い合わせは、小堀煌治(011-591-2836)

畑 正輔(011-894-0017)まで。

◆総会のご案内

日時：平成24年4月13日(金)午後6時30分

場所：かでの2・7 310会議室

総会終了後に懇親会を予定しています。

【新しく会員になられた方々】

藤本 孝 (札幌市東区) 小川 巖 (札幌市南区)

加藤 茜湖 (札幌市厚別区) 小川 雅憲 (札幌市豊平区)

山口 ちひろ (札幌市白石区) 石田 卓也 (札幌市西区)

香内 実 (札幌市中央区) 渡会 やよひ (札幌市豊平区)

—宿泊探鳥会のお知らせ— 利尻島

今年は2泊3日で利尻島です。コマドリなど島で繁殖する鳥たち、遅ればせながら渡り途中で立ち寄る鳥たちなど、たくさんの鳥を楽しめそうです。



月 日 5月18日(金)～20日(日)

集合場所 札幌駅北口「鐘の広場」

集合時刻 18日午前7時30分

1日目：メグマ沼で探鳥後、利尻島へ

2日目：姫沼、森林公園、町立博物館、オタトマリ沼

3日目：稚内、サロベツ原野、豊富を経て札幌へ

札幌帰着 20日午後8時半頃

定 員 45名

参加費用 41,000円(バス代、宿泊代、食事は18日昼食から20日夕食まで)

宿 泊 1日目：利尻富士観光ホテル

2日目：ホテル利尻

申込み先 佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事
(電話 011-596-2660)

※4月2日(月)午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

※午前中は電話が混み合いお待ちいただくことがあります。話中でも、ツーツーという音は発信されませんが受付致しておりますので、おかけ直し下さい。

旅行代金 申込み終了後から4月16日(月)までに下記口座に振り込んで下さい。

北洋銀行 札幌駅南口支店

口座名 (株)エイチ・ピー・シー・ビジョン

普通預金口座番号 3790202



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- 👓 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- 🚶 公共交通機関を利用される場合には、事前に時刻・時間などをお確かめ下さい。
- ★ 探鳥会の問い合わせ
(社) 北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

開催日	探 鳥 地	集 合 場 所 及 び 集 合 時 刻
4月15日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 午前9時30分
	地下鉄東豊線環状通東駅発、中央バス(北札苗線)「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
4月22日(日)	宮 島 沼	湖畔 午前10時
	JR岩見沢駅発又はJR石狩月形駅発、中央バス(月形行又は岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月29日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	JR新札幌駅発、夕鉄バス(文京通西行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちがほほ出揃う頃です。緑が萌え始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
5月5日(土)	藤 の 沢	白鳥園 午前9時
	札幌駅発又は地下鉄真駒内駅発、定鉄バス(定山溪行又は豊滝行)「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤野マナスル(岡田の山:316m)をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月6日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月29日の案内を参照してください。 夏鳥が勢揃いします。木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月13日(日)	千 歳 川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 午前8時
	交通機関はありません。自家用車の相乗り希望者は幹事に相談してください。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミもきっと楽しめます。	
5月18～20日	利 尻 島	
	詳細は今号一宿泊探鳥会のお知らせを参照してください。	
5月27日(日)	鶴川河口	鶴川温泉四季の館 駐車場 午前9時45分
	札幌駅又は地下鉄大谷地駅各ターミナル発、道南バス(浦河行/ベガサス号)「四季の館前」下車。 鶴川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
6月2日(土)	平和の滝	平和の滝駐車場 午後6時30分
	地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線)「平和の滝入口」下車、徒歩20分。 ヨタカ、コノハズク、マミジロなどの声を楽しみます。夜ならではの探鳥です。懐中電灯や防虫剤の用意を。	
6月3日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月10日(日)	厚 別 川	川下公園駐車場 午前9時
	地下鉄東西線白石駅発、中央バス(川下線)「川下公園」下車。 昨年に東米里から変更になりました。厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月17日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月29日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月24日(日)	福 移	福移小中学校前 午前9時
	地下鉄環状通東駅発、中央バス(北札苗線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>